

## 若者は幻を見、老人は夢を見る

近藤十郎

奨励者紹介[こんどう・じゅうろう]

学校法人梅花学園学園長

同志社女子大学名誉教授

『神は言われる。  
終わりの時に、  
わたしの霊をすべての人に注ぐ。  
すると、あなたたちの息子と娘は預言し、  
若者は幻を見、老人は夢を見る。  
わたしの僕やはしたためにも、  
そのときには、わたしの霊を注ぐ。  
すると、彼らは預言する。  
上では、天に不思議な業を、  
下では、地に徴を示そう。  
血と火を立ちこめる煙が、それだ。  
主の偉大な輝かしい日が来る前に、  
太陽は暗くなり、  
月は血のように赤くなる。  
主の名を呼び求める者は皆、救われる。』

(使徒言行録 2章17—21節)

### いま、若者は幻を、老人は夢を見ているか

いま、私たち若者は幻を見ているでしょうか。老人たちは夢を見ているでしょうか。現代を生きる私たちは、目まぐるしく変わる現代の世相の中で、そんなものは見たことがない、見る余裕もない、見る必要もない、と言って気にも留めないでいるかもしれません。しかし、あえて言うならば、多くの人々が幻を見ることを忘れ、夢を見失いつつある中で、いまの時こそ見るべき幻を見、見るべき夢を見る生き方が、私たちの日々の精神生活において厳しく問われている、と言えるのではないのでしょうか。

私たちの精神的風土では、多くの場合、「幻」や「夢」は、非現実的なもの、意味のないもの、限りなく儚くて実体のないものとして受け止められています。極めて消極的、否定的なニュアンスでとらえられている概念です。幻は幻想や幻影、妄想につながり易く、夢は夢想、悪夢、迷夢などを連想させます。

### 幻と夢のもつ積極性ということ

しかし、「幻」にも「夢」にも、全く正反対の、極めて積極的で実体の伴った意味合いがあることを忘れてはなりません。聖書のテキストにおいて取り上げられている「幻」や「夢」には、このような積極的ニュアンスが込められているようです。使徒言行録の著者は、旧約預言者のヨエルの預言を、次のように引用しています。

神は言われる。  
終わりの時に、  
わたしの霊をすべての人に注ぐ。  
すると、あなたたちの息子と娘は預言し、  
若者は幻を見、老人は夢を見る。

「終わりの時」というのは、旧約聖書的な時間の枠組みにおいては、歴史を導き支配される神の救いの計画が完成する時、という意味で言われている言葉です。紀元前5世紀の預言者ヨエルは、彼なりの終末理解に基づいた信仰によって、「終わりの日」をそのように理解し、その時には、神の霊がすべての人々の上に注がれ、若者たちがこの神の救いのリアリティを実体の伴った「幻」として見、老人たちもまた同様に実現した「夢」として見るができる、と約束したのです。「幻」は、ヨエル書のヘブライ語ではハッゾーン（英訳では vision）、「夢」は、ハーローム（英訳では dream）が用いられていますが、いずれの場合も日本語的な消極的なニュアンスはありません。いまという時も、これからの時も、終末の時、神の救いの計画が確実にしかも完全に成就する時として、預言者は彼の時代にあっても誠実に生きようとする姿勢を貫きました。若者たちが、いまという時代に幻を抱き、神の意志に従って大いなるヴィジョンをもって生き、老人たちが時代にふさわしく壮大な夢をもって生きることができ、そのような時がきている、というわけです。

私たちに与えられた聖書のテキストは、使徒ペトロがペンテコステの出来事の後に語った説教の冒頭部分です。使徒たちがエルサレムで語った言葉は、圧倒的な迫力をもって迫ったので、敵対者たちでさえもあつけにとられるほどでした。「人々は皆驚き、とまどい、『いったい、これはどういうことなのか』と互いに言った。しかし、『あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ』と言って、あざける者もいた」（2章12—13節）とあります。しかしペトロは、「今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているわけではありません」（15節）と言っています。神の霊が注がれる時、「若者は幻を見、老人は夢を見る」ことができるのです。

### 現代人にとっての「幻」と「夢」

いま、ここで、もう一度自分自身にもここにある人々にも改めて問うてみたいのです。私たちはいま、人生に幻を見、夢を見ているでしょうか。うたかたの夢、どうせ実現することはない幻想を夢見ることはあっても、初めから夢は夢にすぎない、と言って開き直っている自分がここにいるかもしれません。非現実的な夢想に耽っているよりは、より現実的なニーズに焦点を当てて、いまの時をせいぜい楽しんで生きること、目に見えて自分に利益をもたらしてくれる事象に関心を集中する、そのような生き方がより現実的なものと

思い込んでいる自分がここにいるかもしれません。しかし、若者たちが人生に幻を見ることができず、老人たちが自分のいまと未来に夢を抱けない時代が、いまの時代であると諦めてしまっているとすれば、あまりにも寂しいことです。

いまは昔の話です。学生時代を私は4年間、大学のキャンパスに隣接した学生寮で生活しました。当時の学生寮に暮らした大半の学生たちは、実家からの仕送りもない貧乏学生でした。私自身も、奨学金とほとんど毎日のアルバイトの収入だけがすべてでした。寮費は1カ月1000円、食費は1日80円（授業料は年間9000円）でした。ただし、その頃たまたま日本育英会の事情が変わって、1カ月7500円の特別予約奨学金がもらえました。この奨学金が実際に手に入ったのは7月になってからのことでしたので、3カ月間の生活費は新婚時代の兄から用立ててもらって何とかしのぎました。兄からの借金は、まとめて貰った奨学金で返済しました。寮の食事は1日80円でしたので、若者たちの飢えを満たすには不十分、食堂にはいつも「寮の食堂で食べる食品ではカロリーが不足ですので、不足分は各自で補ってください」と書かれた張り紙が貼ってありました。ちょうどその頃、いま朝の連続テレビドラマ「まんぷく」に出てくるインスタントラーメンが出回ってきたのです。飢えた若者たちの胃袋には、この即席のラーメンが重要な意味をもっていたのです。安価で、ガスの火さえあればほんの10分ほどででき上がり、味も結構いいものでした。テレビドラマは毎日見ているわけではありませんが、この即席ラーメンを創出するための、主人公夫妻の血の出るような工夫と努力、というテーマがこれから展開されることでしょうね。でき上がった作品ではなく、それができ上がるまでの創造の苦しみや、そのための闘いといったプロセスをドラマの登場人物たちがどのように演じてくれるかが見ものです。

目標を設定し、その目標に向かって全身全霊を込めてチャレンジする、そのような生き方には美しいものがあります。その目標設定や、視点の置き方といった点が、私たちがいま考えている幻、夢と深くかかわっているのです。

### 役に立たない学問をこそ

私が大学に入学して人文科学科を専攻した頃、何人かの先生方が強調しておられたことを覚えています。「大学でまず何を学ぶかという時、大切なことは一見役に立たないと思われるような学問に挑戦することだ」というわけです。はじめのうちは先生たちのこのような言葉の意味があまりよく呑み込めなかったのです。というのも、私は最初の受験の対象学部には〇〇大学工学部機械工学科を選んでいたので、破産状態にあった実家の家計を即席的に救済して借金まみれで苦勞していた親を救済したい、と願ったのです。高度成長期にあった大企業に最短距離で就職して、高いサラリーを得ることができたらと思ったのです。しかし、その願いはあまりにも功利的でかなう筈もなく浪人生活を余儀なくされ、「儲けにならない」文系の大学に進むことになったのです。文学や社会学、心理学、哲学、語学といった学問の世界は、私の学的好奇心を満たすに十分な幅の広さ、深さを示してくれました。教会やキリスト教信仰との接点も、そのような状況の中から見つかりました。同志社における神学の学びも、遠からず実現することになりました。

それから時を経て、イエール大学における研究生活の機会が与えられましたが、当時同じ大学で理系の教授であられたレックマン先生ご夫妻がホスト・ファミリーとして、私たち家族をバックアップしてくださ

いました。長女のエミリーちゃんは近くの公立中学校の生徒でしたが、「どんな勉強をしているの」と訊いたら、国語（英語）や数学、地理、生物といった一般の科目に加えて、ドイツ語やフランス語のほかに、ラテン語、ギリシャ語もある、と言ったのには驚きました。中学校でラテン語、ギリシャ語か、というわけです。お母さんに確かめると、きっとそれは学問をすることのために基礎となる古典語を学校が重視しているからではないか、ということでした。一体、「役に立つ学問」とは、どんな学問なのだろうと、改めて問い直してみる必要があると思いました。

### ノーベル医学生理学賞の受賞者、本庶佑（ほんじょたすく）博士の場合

本庶先生の今回の受賞は、むしろ遅すぎた、とさえ巷では言われているそうですね。彼自身は世間の人々がどう評価しようとしてくれまいと、あくまで淡々とご自分の研究に全力を注いできた結果であって、研究の成果が多くの人々の苦しみや痛みを軽減するものになってくれることを願うのみ、といった発言をしておられたのが感動的です。オプジーボという免疫抑制剤が、感染症に革命的な威力を発揮したペニシリンと同様、遅くとも今世紀中にはガン治療に驚異的な貢献をもたらす日がくる、との記事が、先日の『朝日新聞』に掲載されていました（2018年10月2日付 朝刊）。当日の社説では、次のように指摘されていました。「心配なのは、いまの日本の研究現場が本庶さんたちを生み、育てた時代と大きく変わってきていることだ。短期間で実用的な成果を出すことが求められ、独創的なテーマに挑戦しにくいとの指摘がしばしば聞かれる」と主張し、基礎研究が重要な役割を果たす、との本庶さんの思いを代弁しているようでした。他人の敷いたレールの上を歩くのではなく、失敗を繰り返しながらも自分の道を切り拓いていく、問題をはぐらかさずに愚直なまでに自らの探求心を突き詰めていく、本庶先生の業績はその研究プロセスの結果でしょう。基礎研究の重要さは、そのような、決して他者におもねることをしない真理探究の姿勢にあった、と言えるでしょう。

### 私には夢がある

マーティン・ルーサー・キング牧師の「私には夢がある」というスピーチには、5回にわたって彼の見た夢について触れられています。彼の黒人解放運動の中身について知らない人はいないでしょう。彼の弁舌の巧みさは、単なる表面的なスピーチ技術によるのではなく、彼が実際に解放運動に命を賭けた姿勢から必然的に備わったものです。「私には夢がある。いつか必ず、ジョージアの赤い丘で、以前奴隷であった人々の子孫たちとかつての奴隷使用人たちの子孫たちが共に同胞として同じ食卓につくことができる日が来ることを」（Martin Luther King, “I Have a Dream.” in: A TESTAMENT OF HOPE ed. by James M. Washington, 1986, p.219 訳は筆者）という文章から始まる、あのあまりにも有名な一連のスピーチです。キング牧師の見た夢は、1963年8月28日、リンカーン・メモリアルでなされてから55年を経た今日まで、未だ完全に実現されたとは言えず、人種差別の問題は依然として根絶にはほど遠いものがあります。しかし夢は夢に終わらないことも確かです。キング牧師もまた、自分の見た夢を単なる幻想や実体のない夢想だとは思っていなかったでしょう。否、それどころか、彼の見た夢はすでに彼の心の中では時間空間を超えて一つの確固たるリアリティになっていたと言えるのではないのでしょうか。

神の救いの計画が実現する終末の時、「若者は幻を見、老人は夢を見る」ことができるのです。いまと

いう時がその時なのです。この時代、未来を予測することは、なかなか難しい時代かもしれません。不確実性の時代、と言われて久しいこの頃ですが、できることなら、どんなに困難で先が見通せない時代であっても、なお歴史を支配し導いてくださる神に己を委ねて、現実の間尺では測れない信仰のはかりにしたがって、幻を抱き夢を見ながら日々を心豊かに生きていきたいものです。そのような精神生活にあえてチャレンジしてみたいと思うのです。

2018年10月10日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録